〔座談会〕その一

入学試験を考える
――大学・女子大学の立場から――

郡嶌　孝（大学経済学部教授）
御牧　拓郎（大学工学部教授）
森田　潤司（女子大学教授）
中村　宏治（大学商学部教授）
司会　橋本　滋男（大学神学部教授）

橋本　先生方、やっと夏休みになったところに、暑いさなか、来ていただきまして本当にありがとうございます。

まず入試に関して、それぞれの学部でご苦労をいろいろと経験なさった、そういう体験をからめての自己紹介をしていただきたいと思います。

入試についての体験から

郡嶌　経済学部の郡嶌と申します。私自身、教務主任をやるたびに、入試問題、あるいはカリキュラムの問題が学部の中で大きくなるたびに関わっています。入試につきましては、毎年、この問題を改革といいますか、やらざるを得ない。これはある意味では、我々が考えているような制度が高校側にそのままの形で、こちらが意図していることが伝わってないということもあるだろうと思います。高校はこの学生を経済学部に預ければ、いい教育をしてもらえるんじゃないかというふうにとらえるのでなくて、この学生を入れれば同志社の合格者の一人として、自分の高校の合格者として、高校が名声を博するというような形でとらえている。だからどうもイタチごっ

こみたいなことがずっと続いておりまして、それを考えながら、そろそろ我々は改革をやらなくてはいけない。ますます入試の改革の問題は、学部の中でも、あるいは大学全体としても大きな問題になるんじゃないかというふうに考えています。

中村　商学部の中村です。教務主任をやってます。

常日頃感じていることを一言だけ申しあげますと、今の入試制度は、学力試験と言うんですけれど、本当に学ぶ力をはかる試験になっているのかどうか。また、多様化ということが言われてますけれど、私は、極論ですけれど、定員が八百人として、八つの方法で百人ずつ採るといったことも考える方向としてはあってもいいんじゃないか。このようなことを従来から考えています。

森田　女子大学の森田です。家政学部に所属しておりまして、四年間教務主任をやってきました。自分なりにタッチしてきて考えてきたのは、入試の多様化ということが言われるのだけども、それは宣伝向きのことじゃなく、本当に自分の大学が欲しい学生を取るような多様化でなければいけないんじゃないかなということです。それから入試は入り口のことですけども、入学させた学生は全て卒業させなければならないという風潮の現在では、もう一つ、出口（卒業時）のことを抜きにしては、多様化ということも考えにくいのではないかなと思っています。

御牧　工学部の御牧でございます。昨年度教務主任をやって、今年研究室主任ということで、特に工学部というのは同志社の中でちょっと毛色の変わったフィールドの学問をやっているところです。

入試に関しましては、工学部を主に考えますと、もう二十数年、何ら変化がございませんで、検討もされていなかったということで、非常に危機感がございましたが、それが大きくならなかった。ところが、ご承知のとおり、今年の三月に工学部は大きく定員割れをいたしました。それをきっかけに皆さんが非常に危機感をもって対処するということで、入試科目の変更は工学部では決定しておりますし、その他の多様化の問題についても、昨年度から今年にかけて鋭意議論をいたしました。工学部に適した学生というのが年々少なくなってきているようなきらいがあります。これは受験戦争の弊害のような気がします。むしろ工学部よりも他の学部での方が能力が発揮できたのと違うかなという人たちが徐徐にふえてきているのをちょっと危惧しております。本当の大学人、学生として受け入れようとすると、やはり入学試験というのは最終的にはないのがいちばんいいのではないかなと個人的には思っています。インタビュー（面接）で入って頂くのがいちばんいいと思います。これは物理的に無理ですけれども、やはりそれが理想だなと個人的には思っております。

橋本　神学部の橋本でございます。大学の方では中村先生ともご一緒に、入試の実行委員などを何年間かやったことがあります。

学部への関心より偏差値で決められる

先生方ご苦労なさっている中で、それぞれ学部にふさわしい学生というのはどういうものかというようなこと、同時にそれら学部の教育内容の検討や、先ほどおっしゃったような出口の問題のことと、いろいろからまってくるわけで、討議すべきポイントはたくさんあると思います。

郡嶌　孝氏

御牧拓郎氏

森田潤司氏

もうすでに幾つかの問題が指摘されまして、今の入試の制度によって高校の教育の制度が相当に歪められているということがあります。昨年の十二月に中央教育審議会の中間報告が出ました。あれで見ますと、悲劇か喜劇か、大変なところまで来ているという問題指摘がありまして、一つの高等学校から特定の大学に入るのは人数制限をせよとか、それから例えば数学のように評価のしやすい学科については、高校二年、三年でも大学へ入れるということがあってもいいとか、相当思い切った指摘がございました。今年の四月に最終答申が出まして、そこでは、少しトーンが落ちましたが基本的には同じような内容になっています。しかし、診断書が書けたからといって、その症状の薬の処方ができるかということになってくると、また別でありまして、中教審なんかでも、いささかもてあましているという実情がうかがえるわけです。そういう大きな流れの中で、我々が実際、現場の中でどういう学生を迎え、どういう教育をしていくかということを考えねばなりません。

御牧　それは端的に言いますと、偏差値で大学を決めてしまうという傾向が特に工学部は強うございまして、特に同志社の場合だと、同志社と国・公立併願というのがほぼ一〇〇%、同志社だけを受けるというのはほとんどない。高等学校や予備校の進学指導で、同志社の場合、偏差値はこれだけだから君はここへ行きなさい、君はもっと高いから別の国立大学へ行きなさいと、学部もここは高いからこっちへ、入りやすいところへ行きなさいと。そういう指導がなされているところがございましてね。そうしますと、本来、文科系でたとえば経済をやりたいという生徒さんが、いや応なしに名前の通った大学で入れるところということで来るようになる。そういう人たちが入ってきたときに、工学部の授業、専門科目等含めまして数学とか物理とか、大体本質的に嫌だなァと思いながら授業を受けるということになりますから、なかなか伸びない。そういう人たちが徐徐にふえてきているような感じを受けます。それは入学試験で入ってくる一般の方も、学内高校の場合もそれが非常に顕著な状況でございますね。

郡嶌　いまおっしゃいましたのは推薦入学の方にもありましてね。本当は同志社に行きたいという学生の中でも、必ずしも志望が経

中村宏治氏

橋本滋男氏

というのは、必ずしも女子が学んではならないということはありませんが、推薦で女子が半分以上になってしまうんですね。そういう女子に面接なんかで、「なぜ経済学を学ぶのですか」というような話をしましても、彼女らが言うのは、まず京都で学びたい、それから同志社というのは、赤レンガの非常にアカデミックな雰囲気がする、三番目には適当にキャンパスに外人さんがいる。そういう面で国際的な面もあるんだと。そしたらどこに経済学がいったかわからないわけですね。高校側からみれば、その後、推薦依頼を断られるというのは非常に怖いわけですね。そうすると、女子だったらまじめに大学に入っても勉強してくれるであろうということになります。そうなりますと、女子のほうが男子よりも将来にわたって推薦入学させてもらえるということで無難になる。それから保護者にしてみても、過酷な受験戦争をやるよりも、推薦でということになる。すべての人のニーズといいますか、そういうものがうまくいって、結局は女子が選ばれてくるという形になってますので、そういう面からいうと、必ずしも経済学を学びたいという目的意識をもった学生が済学部じゃないんですけども、経済学部の推薦があるんだったら、経済学部の推薦でもいいじゃないかと、まず同志社に入ることのほうに重点が置かれています。ここ十何年間、こういう推薦入学をやり始めまして、意外に思いましたのは、地方の高校から女子学生がたくさん入ってくるんです。もともと経済学どれだけいるかというのはちょっとやはり――。

橋本　それは特にいまおっしゃったのは、指定校の推薦の場合ですね。

郡嶌　そうです。指定校のほうですね。

橋本　商学部のあたりでは、指定校の推薦については、特に何か問題はあるでしょうか。

中村　基本的にはやっぱりそういう傾向はあるでしょうね。ただ、商学部の場合は、女子学生も含めて、資格取得、たとえば公認会計士とか税理士とか、そういうものを目標として持っている者が比較的多いように思います。その点では、さきほどの経済学部のお話に比べれば、やや志向性は強いといったようなことは言えるかもわかりませんね。

でも、全体の傾向としてやはり同志社、赤レンガ、ブランドとしては最高だという(笑)、そういう傾向はあるんじゃないですかね。

ついでに御牧先生から出されたことも含めて考えていたのですけれども、この間の入学制度の検討や教務としての業務の中でいちばん考えてきたことは、大学・学部に対する志向性と意欲ということが、入学してからの決定的な要因だと言うことです。受験の学力で

はないということを痛切に感じてます。

商業高校について、何人か受け入れているんですけれども、当初は、かなり危惧がありました。学力的についてこれるのかどうかと。現実を見ますと悪くないんですよね。当初、予想していた以上によくやっているわけですね。

他方、かなり偏差値的には高い者で他を落ちて同志社商学部へ来ちゃったという、要するに不本意入学者と、それから同志社に、商学部に来れてよかったという者と比べると、後者の方が入ってからぐんぐん伸びていっている、そういう印象を強く持ってますね。先ほど入学試験は学ぶ意欲も含めた、そういう能力をみる試験である方がいいのではという話をしたんですけれども、そうした要素も見れるような入学制度の多様化を今後さらに考えていくことが必要なんじゃないかなと思っています。

郡嶌　私たち推薦選抜をやる前に、幾つかの大学を訪問させていただいて、いろんな聴き取りをやってみました。ある大学で、そこは非常に偏差値は高いらしいんです。受験勉強ばっかりをやってきている中では、その大学の学生は非常に優秀な、つまり言い換えますと、京大落ちの学生がずいぶんいて、偏差値は高い。それで勉強してくれたらいいのですが、その偏差値の高い子が、つまり京大落ちの連中というのが大部分なんですね。六〇％か七〇％らしいです。そうしますと、せっかくその大学を第一志望にしていたという学生が入っても第一志望じゃない学生が相当入ってますので、何か自分たちがやっとあこがれの大学に入ったとたんに、こんなとこに我々は来ている、本来はこういう大学に自分は入って勉強するつもりはなかったのだというような不平が学内にあるために、喜んで入ったのがどうも間違いみたいな形になりまして、それで完全に愛校心がなくなるらしいんですね。

それから二番目に、自分を教えていた教師をばかにし始める。本来は京大の偉い先生に自分たちは習うはずなのに、こういう先生に習ってというので、だんだん雰囲気がどうも悪くなったらしいんですね。

そういう面から言うと、やっぱり先ほど中村先生がおっしゃった志向とか意欲というのは、非常に大事にしないといけない、そういう偏差値による輪切りの中で、本当は入りたくなかったんだけれども、自分が入れる大学だからと選んだところで、最後まで四年間、彼らにとっても不幸ですし、それだけじゃなくて与える影響の中で大学全体が沈んでくるのだと思いますね。我々の方でも同志社に入ってよかった、あるいは同志社が育てたい学生、そういうのを意識的に受け入れていくような方法を考えていかないと、そういう例もちょっと小耳にしましたね。

中村　たとえ偏差値では何ポイントか下であっても、入学して本当に喜んで学ぶ意欲を持った学生を受け入れるという、そういう体制を入試体制としてはつくるべきだという感じがしますね。

指定校推薦入学の実情

橋本　指定校の推薦制度ということで、女子大学のほうはどんなふうな実情、あるいは問題をお待ちでしょう。

森田　女子大学全部で五種類の、推薦制度を持っております。そのうちの一つに指定校制度がありまして、それは受験者数、合格者数、入学者数を基準にして一定の比率でこち

らが指定校を選んでいます。それでいきますと、近畿地区に固まる可能性がありますので、その一部を近畿以外の九州なり、四国、中国に割り振るという形で算定して指定校を決めさせていただいているのです。

その中で問題点は、指定をしても学生を送ってこない学校が幾つかあります。これはれっきとした受験校で、評定平均値が四・〇という基準がありますので、これらの学校の四・〇の学生ではもともと一般入試でもいけますし、それは国立に直行するということですから、送ってこないのはしょうがないのですけども。そこで今年から改革しまして、そういう目減りも勘案して指定校の枠をふやすとかというようなことをやっています。

指定校制で入ってきました学生の学力調査を、過去数年にわたり卒業生に関してとったんですけれども、総じて言いますなら、一般入試の学生より劣ることはないし、むしろ平均点に関しては優秀であるという結果が出ています。学校から推薦されてきますので、一応誇りと責任感をもってやっているようで、指定校制の学生に関しては、いちばん問題が今のところないんです。もっと送って頂きたいなというのが高校に対しては要望としてあります。

それから一般入試での合格者について、アンケートをとってみたんですけども、本学、女子大学を選んだ理由では、「社会的評価が高い」というのが短大では一番高い。それから四年制大学のほうでは「京都で学べる」、「自宅通学ができる」、これを合わせると三二％ぐらいになります。

で、「第一志望ですか」という質問をしますと、四年制大学のほうで約四一％が「そうです」と答え、「いいえ」が残念ながら五〇％を超えるわけです。じゃ、「いいえ」と選んだ学生はどこが第一志望であったかと言いますと、それは合格したけども入学手続をとらなかった学生の資料から大体予想がつくのですが、同志社大学とか関学という共学志向なんです。家政学部の食物のような自然科学系は国公立志望が多い。国公立と両方をかけていまして、国公立に通った場合、そちらに行くというケースが多いように思います。

ですから、女子大学独特の悩みがありまして、いまの女子学生の共学志向、先ほど経済学部でも女子学生が多いというお話がありましたけれども、そういう共学のほうに行ってしまう学生を、女子大の特色というか、こういういいとこがあるということを、いかに宣伝して、定着させるかということが一つの課題かと思います。

御牧　工学部というのは他の学部と相当様相が違いまして、同志社の工学部を合格する学生は、国・公立にもほとんど合格しまして、そうしますと、国・公立へ行ってしまう。これはその人たちの一部をこちらへ呼び込もうとすると、同志社の授業料を国・公立と同じくらいに下げない限り、絶対不可能でございましてね、そうすることはできないと。そうすると、いかにして同志社の工学部にそういう学生を呼び込むかというのが我々の最大の課題になっているわけです。入試の科目そのものは、四科目ですね。そうしますと、それらの京大、阪大等の大学を受ける学生は、同志社を試しに受けるという形になっていまして、そっちへ流れてしまう。もう一つの問題として、工学部におきましても、指定校制の推薦入学制度をとりました。そのためにいわゆる一般の入学試験で入る数が減り、極端に偏差値が上がってしまった、それが一つの悩

みでございますね。だから推薦入学がいいというものはありますけれども、逆に工学部の場合は、国・公立を含めまして、工学部の学部がたくさんございますから、どうしようもない事態になっている。そのためにたとえば立命館大学なんかは数学一科目の試験とか、そういう非常に思い切った手を打っていられます。工学部についてもいま議論をして、大体の案ができ上がって、近々公表になると思いますけども、いろんな議論をして、試験の多様化を図るようにしております。

大学が偏差値や併願に惑わされる

郡嶌　国・公立との併願ということを抜きにすれば、経済学部でもこのごろ偏差値で志望を決める学生が多く、そのため経済学部の偏差値が非常に高くなるという場合があるのです。

といいますのは、いわゆる同志社が本来ではなくて、その上を狙う人たちが滑り止めに受けてくるんですね。そうして彼らが受けると、通ります。ところが、彼らが上の方の大学に通りますと、どうしてもそちらの偏差値の高い方の大学へ行くという形で、今度は入学者が少なくなるんですね。少なくなるというので、多めにとることにしますと、今度は偏差値が下がるんですね。そういう偏差値の上がり下がりによって、入試の全体が変動しまして、それがどうも影響を与えてきている。だから同志社を、経済学部を第一にというようなところというのは、まだ核としては形成されてない。同志社の経済学部、一生懸命そこをねらっているというのは、どうも少数であって、それがどうも上の方との併願であるとかという形で押し出されてみたり、それから逆に今度は偏差値が低くなると、そういう人たちが大いに入ってくるというように、各学年によって同志社を志向する者が増減している感じですね。

橋本　予備校とか高校の指導なんかを見ますと、最初から受験のための体制を組んで、私立型か国立型でいくかということをやっていて、一応文科系では、科目が三科目だけということもありまして、私立型が多いと思うんですが、工学部の方では国公立との併願があるのですね。

郡嶌　文科系でも私立大学での大学間の併願がありますね。

橋本　こちらが偏差値に惑わされるというか、その年度その年度の定着だとか、入学する学生の数や受験生の層とか数とかという点で踊らされているというような部分はかなりあるということになりますね。

御牧　そうですね。特に工学部の場合は理学部を含めまして、学科が非常にたくさん、幅広うございましてね。全国的に考えますと。そうすると、その中で偏差値はおまえはこのぐらいだから、同志社にはちょっと無理だと、ぎりぎりだと、それだったら別のところの別の学科へ行きなさいというのがありまして、逆に航空工学をやりたいんだけど、君の偏差値だったら同志社の工学部へ行ったほうが入りやすいから行きなさいと。で、入ってきますと、理学部関係の勉強をしたかったのに機械へ来るとか、そういう学生があるわけですね。そうしますと、入った後でやっぱり自分として興味がある違う方向へ進まなきゃならんということになりましてね、なかなか難しいところがありますね。

同志社に入りたい学生をどう発見し、どう育てるか

これは何も全部そういうふうな受験産業とか、入試のせいではなくて、入ってきた人たちはそういう方向を持っていても、我々、教員のほうが我々のほうに顔を向けるようにしなきゃならんというのが最大の責務でございましてね。

一つはこれは文部省が言っている自己評価システムを含めまして、いかに研究、教育を活性化さすかというのが最大の問題だと思っています。それはやっぱり私を含めて先生方の責任だろうというふうに思いますから、そこのところを改良しながら対応しなければ、いくら入試をどうやったって、よくならないと僕は思いますね。非常につらいところなんですね、これは。

橋本　そうすると、今の仕組みでは向いてない学生もかなり入ってくるから、それを向くように仕向けるこちらの姿勢ですね。

御牧　姿勢をつくらなきゃならない。だから先ほど言ったのは、学生に責任を転嫁しているところがございますけれども、実際は半々ぐらいの気持ちで対応しなきゃだめだなという気はいたしますね。

郡嶌　同じことになるかもしれませんけれども、経済学部の学生をずっと見ていまして、同志社というのがこれだけ受験生が多くなっているのに対して、必ずしもそんなに爆発的に受験生がふえることはないということも含めて考えていきますと、御牧先生がおっしゃいましたように、多くの受験生がどうも上の方の、つまりうちよりも偏差値の高い大学の滑り止めとして受けている。その人たちは合格しても来てくれない。逆に同志社に本当は来たいんだけども、彼らははじき出される。彼らはまた下に、いわゆる滑り止めを持っているわけですね。そこのところに本来は同志社に来たかったんだけども、入れなかったのがいる。ところがそこのところがまた偏差値が高くなってきているんですよ。だからかつて、うちよりも偏差値の低かった大学の偏差値が高まってくる。

推薦とかいろいろな入試の多様化の問題も、どういう学生をとって、そしてどういうふうに教育するのかというのがまずあって、それからこういう入試の改革の問題につながってくるのじゃないかと思います。だから我々はどういうことを教えようとしているのかということのアイデンティティーみたいなことをはっきりさせて、そしてそのためにどういう学生をとるのだと。そうすると、どういう学生をとるかということにどういう工夫があるのかという形で入試を考えていかないと、どうもこちらが思っているほどに、高校側も考えておりませんので、そういう面での対応をじっくり考えていくようなことが今後、望まれるような気がします。

橋本　それは初めに中村先生がおっしゃったように、入試での学力が入学後の意欲とか、同志社の教育内容に向いているかという志向性とマッチしてないというご指摘がありましたが、そういう問題に戻ってきますね。

中村　そうですね。

御牧　特にそれは、いま入試の関係ですが、学内高校の学生を預かってますと、それはもうはっきり出てきますのでね。自分たちの学部、学科にほしい人に全国から来ていただく、そのための手だてというのをやっぱり考えなければならないと思う。そのためには同志社の大学で、いま郡嶌先生がおっしゃったよう

に、どういうことを教えて、どういう教育をしているかというところですね、それを知らせる必要があると思います。それが現在は行われていない。大学通信ぐらいじゃないですか、入学案内とか。工学部では、今年初めて工学部自身のパンフレットをつくりましてね。さらに発展すると、今度はそれを外国の教育機関とか研究機関にまで配布するようなものにまで拡大したいというのが本音でございまして、その第一段階で、高校側にそれを全部知らせるというのがやっぱり必要だと思います。

それは同志社の場合は、広告といいますか、宣伝といいますか、そういうものに対する対応が非常におくれていると思います。昨日、オープンキャンパスがございましたね。オープンキャンパスでも時間が限られているし、それぞれの先生がたくさん出てこられていませんから、質問したってちゃんとした答えが返ってこないんだと、仕方がないんですけどね。そうすると全国の受験生、高等学校もしくは保護者に、同志社をどのようにして知らせるかというのが入試に関する最大のポイントになってしまいそうな気がいたしますね。

橋本　そうすると、こちらの教育内容の充実と広報活動とその両方ですね。

御牧　そうだとぼくは思いますね。

森田　うちも広報は予算が少ないんじゃないかと思います。ひところに比べれば、かなりふえていますが、まだまだと思いますね。

いま受験生が持っているイメージというのは、わりと以前につくられている同志社なり、女子大学のイメージで、それがまだ生きているという感じがします。だけど、卒業生は毎年どんどん出ていくわけですから、その卒業生がどれだけ、どこでどういうふうに活躍しているかということが今後の評価につながってくるでしょうから、そこをどう広報していくかでしょうね。先ほど出口もあると言いましたのは、入り口のところでいい学生、本当にうちの大学に適している学生を選ぶと同時に、それを育てて、外でまたいろんな形でいかに活躍してもらうかというのがいちばん重要じゃないかと思うんですね。

多様な入試方法の開発

中村　先ほどから実は経営戦略の話が出ていると思うんですが(笑)、一つは確かにナショナルブランドとしての同志社をどう確立していくかということで、教学内容の充実、それからマーケティングと言っていいのか、PRと言っていいのかわかりませんが、そういうところをもう少しやっていくといったようなことが言われていると思うんですけれども同じことは入学者の受け入れについても言えるわけでして、よく考えてみると、いままでかなり省力経営でやってきたという感じがするわけですね。入学者選抜、どういう学生を受け入れるか、いちばん大事なことにもっと力を注いでもいいんじゃないか。

先ほど八百人の定員がいたら八通りの方法で百人ずつとりましょうといった考え方もあり得るのだと言ったわけですけど、たとえば入試センターの試験を基礎的学力判断のベースとして、一定の資格以上の学生については、今の小論文面接とかそんなんじゃなくて、たとえば、スピーチをやってもらうとか、いろいろ考えられるのではないか。偏差値に集約されるような高校の勉強では獲得できないような能力というのを見る——表現能力だとか論旨をまとめてみんなにきっちり説得的に展開できる能力とか、これは単に論文を書くと

いうのではなく、そうじゃなくて、たとえば先生十人を前にして、プレッシャーがあるかもわかりませんけれど、そこで十五分スピーチをやらせてみるとか、そういうふうなことも含めていろんな方法を考えていくべきだと思うんですね。

郡嶌　全く賛成なんですけども、今の受験体制の中で特に受験校を見ていった場合、そういう学生がいるのかどうかですね。

私のところは推薦選抜の方法を考えたときに、いままでの選抜というのは、どちらかといいますと、内申書の中でも成績の方ですね、学力について基準を置いていたけれども、今度は内申書のもう一つの側面、いわゆるクラブ活動であるとか、通常の高校生活の中からそういう芽を見出そうというようなことのために、たとえば今までしたら、内申書の成績だけを見ていましたから、成績以外の欄には特記事項なしというふうに書かれていたわけなんですよね。それを何とか先生方に、特記事項なしで推薦してもらうのは困りますよ、もっと中身というものを学力と同じように充実させた形で出してくださいということを言いましたとたんに、かなりの高校の先生が頭を抱えられたわけです。受験勉強だけをやっている学生も面倒見なくちゃいけないのに、推薦に関しても個々人のそういう個性を見るというのが先生方、もうほとんどできなくなっているんですね。高校のほうは。

そういう意味から言うと、我々はあえて同志社が推薦選抜なり推薦なりをやって、そういうところを評価していくということは、ある意味では高校側の考え方を長い目で見ますと、変えていくという一つの意味はあるだろうということで踏み切ったんです。

橋本　他の大学では高校の推薦なしに、自己推薦を打ち出してますね。そういう意味じゃ必然性があるわけですね。

中村　私が先ほど言ったのも自己推薦なんですね、入試センター試験で何点以上、その学生は自己推薦で出願できると、後はたとえばスピーチという形で判断してとるというやり方なんかもありますね。

郡嶌　一般入試というのは、選抜型といいますか、順番をつけていって全員が受け入れられないから、この学生は同志社で受けるに学力は当然あるのに、教育できないということで落とされている。それに対して推薦の場合は、選抜ではなくて、この学生は同志社だったらこのぐらいの学力があれば、何とか四年間で卒業できるであろうということを見れば、あとはそれ以外のところを評価してやるという形で見ていくというのは非常にいいことだと考えているんですけどね。

森田　推薦というのは、いい学生がほしいというのと、一つは入学定員割れを起こさないという、一定の人数を早い目に確保したいというのが本音としてあると思うんですよね。で、女子大学のほうでは短大は定員の約五〇％を推薦で押さえているんです。ファミリー推薦、同志社諸学校、それと指定校と公募推薦というので五〇％、四年制のほうは公募推薦はなくて、三〇％を押さえているんですよね。それで定員は確保しやすくなるのですけれども、そうすると、一般入試の枠が小さくなりますから偏差値が上がります。そうすると、入試説明会とかでは、難しいですねというような声が短大については返ってくるようになる。高校は、どういう形で大学を評価――評価というのは、入試という面だけの評価なんですけども、しているのかなと思うんですね。

御牧　工学部では臨時定員増になりまして、ちょっとパーセンテージは落ちましたけれど、学内高校の推薦、一般高校の推薦を入れまして二六％ぐらいです。従来は大体三四％ぐらい、工学部としてはもう少し、四〇％ぐらいまでがいけるんではないでしょうか。何パーセントが適正かというのが全くわからないわけでして、ただ、そのぐらい。四〇％以上になりますと、今度は一般高校から入ってこられる入試の入たちにものすごく圧迫を与えますから、それはやめておいたほうがいいというのが大勢の意見ですね。

森田　推薦の時期の問題がまたありますでしょう。私学同士が競争になってきてますから、だんだん時期が自然に早まってますね。高校の説明会なんかへ行きますと、九月、十月はやめてくれといわれます。だけど、こちらは早くしたいと。

橋本　先ほどの先生のご質問で、私、手元の資料で申しますと、九一年四月に入学した者で、全入学者四千五百人ほどのうち三五・五％が推薦入学、そのうち、学内高校からが二三・三％という数字になっています。おっしゃるような推薦入学は、経営的にはメリットがあるということで、国立もほとんどこれをやっているわけですけど、高校の方から言うと、もう九月、十月でさっさと決めるのは一種の青田買いで、あと、クラスで授業をまじめに受けようとしない者が出てくるとか、弊害があったり、ひどい大学では七〇％、八〇％ぐらいを推薦で確保して、一般入試が非常に少なくなる。今年の六月でしたか、文部省が各大学に対しまして通知を出しましてね、各種の入学の枠を明示せよということになってきましたので、そういう問題は多少是正されていくんじゃないかと思っていますけれども、それは逆に大学の方では、いささか厳しい道が押しつけられたということになるんじゃないかと思いますね。

大学の評価と学生のイメージ

橋本　大学の評価が就職情況で決まるところがあるために、好景気の現状では、工学部が割りを食っているのでないでしょうか。文科系の学部ですと、わりと遊んで四年間過ごせる、就職もいまの状況なら安心だというふうな学生が一般的な風潮としてある……。

御牧　はっきりいいますと、これはオフレコにしないといけないのですけど(笑)。学生自身がですね。高等学校で同級生が片や文科系へ行って、片や工学部へ来たと。工学部へ来たとたんに、実験、実習その他びっちり授業があって、卒業論文を出して、それで徹夜もしなきゃならんと。出たとたんに同じ会社へ入って給料が一緒だと、何でしんどい思いをして給料が一緒だと(笑)。それだったら最初からそういうことのないところで、卒論もなければ、そこへ行ったほうがいいと、それでそっちへ行くというのが現実にあります。特に学内高校でぼくなんか相談を受けるんです。学内高校の子弟の保護者から電話がかかってきて、工学部へ行きたいんだけども、工学部はしんどいでしょうと。で、しんどいと言うと、息子は本当は工学部が好きなんだけれども、しんどいからもう少し授業の少ないアルバイトのできるところへ行きたいという、そういうのがあるのですよ、現実に。

郡嶌　聞いたことありますね。私も。

御牧　これは大学だけの問題ではないような、全体的な風潮ですね、社会の問題だと思いますけどね。そういう人たちを工学部に本当は引っ張ってこなきゃならんというのが

我々の責務になると思いますけど。

森田　それは全体的に言えば大事なことで、実は高校生なり大学生を含めて、学生の考え方というのが以前とすっかり変わって来ていると思うんですよね。ところが、我々が推薦入試とか何とか考えるときは、教員から見た望ましい学生像みたいなものをもっていましてね、そういうことを学生に望むんですけども、学生の価値観というのはかなり変わって来ているわけですね。その辺のギャップがいまあるような気がするんですよ。しんどい、まあ三Kに近いようなとこは避けるとかね。

御牧　一つはね、これはいま先生がおっしゃったとおりなんですけども、大学サイドから高等学校へのアプローがほとんどゼロだといま思います。各学部とも。学内高校を含めましてね。

橋本　夏と秋にオープンキャンパスというのをやってまして、昨日もありました。高校や予備校から学生が千人ほど田辺、今出川に来まして彼らに学部の説明をする。それから学内高校には各学部の教務主任の先生方が出かけていって、自分の学部はこんなことをしているのだという、説明会は一応やっているんです。ただ、高校のほうでどの学部に行くかというときの割り振りや指導なんかがどんなふうになっているか。

御牧　そうですね、結局こちら側のアプローチというのが、いま先生がおっしゃいましたように、学内高校の説明会でも、結局向こうがアレンジをして、そこの学部を希望している人たちだけを集めてそこで説明する、それ以前に、もっといろんな情報を生徒さんに与える必要があると、そのアプローチが欠如しているなという気はいたしますね。それは先生同士の間で、高等学校の先生と大学の先生との間のコミュニケーションが一つはございませんでね、これはたとえば学内高校でいきますと、同じ学内ですらそんなんですから、一般の高等学校なんてこれは不可能に近い状態です。

森田　うちでオープンキャンパスをやっているときに、「在校生に聞く」というコーナーをつくってまして、各学科の学生に何人か並んでもらっていて、学校生活のことを何でもいいから相談しなさいというコーナーをつくっておきますね、そこはいつも人だかりがしているのですよ。一般の入試の説明のそういうテーブルをつくっていても、そちらにはあまり来ない。まあ失敗するとえらいことですが、うまく現役の学生を入試の広報に使うと、その学生もまた意欲をもって自分の学校のことを説明しますのでね。おもしろいんじゃないかと思います。

御牧　確かにそのとおりだと思いますね、我々が説明するのは、自分では新しいと思ってましても、はっきり言ってもう古いんですよ。だから我々よりずっと若い人たちといいますか、三十歳になるかならないかぐらいの先生が実際に説明されたほうが、生徒さんに対しても、高等学校の先生に対してもインパクトがあって、それがいちばんいいなと我々は思いますね、実際やりまして。

中村　なぜそうなるのかというところが問題になるんですよ、恐らくね。いま求められている情報というのは我々が大学について持っていたイメージで、たとえば大学に入ってどういう学問をするかとか、どういう技能ないし知識を身につけるかというふうなレベルじゃなくて、それだけじゃなくて、もっとどんなキャンパスライフが楽しめるかどうかと

いうわけですね。

さまざまな周辺情報を本当はほしがっている。だからそれは結局、大衆化ということの必然的な帰結だと思うんですけども、進学率が一〇％そこそこ、六〇年代の最初はそのぐらいだと思いますけど、それからもう四〇％超えるようなレベルになってきた時の大学に対する希望といいますか、過ごし方、先ほど工学部でしんどいのは嫌だというのが出てきましたけど、それは明らかにかつての一〇％だったら、そんなこと言う学生はまずいないことなんで、いまはもう四十何％になっているから、そういう声が出てくるわけですよね。だからそれに対応していく大学もあるでしょうけれども、同志社はたとえばそういう要求に応えて、いやァ、楽しい楽しい大学ですよということを売り物にしていいのかどうかというのもちょっと気になるんですけどね、逆に。

森田　私が言ったのは、楽しい楽しい、そういうことじゃなくっても、やっている講義の内容とかでも、我々が言うよりは先輩が言うほうがよく通じるという意味も含めて言ったのです。

中村　なるほどね。

御牧　結局、大学の中の教育そのものもそうでしてね、工学部、特に電気とか私の機械なんかは、実際に会社へ勤務されている方を特別講師で呼んで講義をしていただいていまして、第一線で活躍中のＯＢを含めましてね、それから実際のものを設計するのでも、現在、企業で実際のものを設計されている、たとえばブルドーザーを設計しておられるとか、そういう人たちに来て頂いて、学生にマン・ツー・マンに近い状態で教えて頂く。そうすると、学生としては先生から教えていただくよりも、非常にインパクトがございましてね、ちょっとしんどいことはしんどいけど、非常に効果があるわけですね。

社会人入学の可能性

郡嶌　もう一つ、立教大学で意外と効果が上がっているなというのは、社会人を入学させるということですね。つまり今までですと、大体十八歳から二十歳という一つの固まったところでの教育であり、大体同じような年齢の学生ばっかりの構成であった中にポッと社会人の方が入ってこられると、そういうことの持っているインパクトというのは非常に大きかったみたいですね。

だから多様な人を受け入れる形で大学自身も変わってくると、学生もただのんびりと楽なところだけじゃなくて、本来、そういう社会的な関わりなんかを持っておられる社会人講師の方もそうですし、社会人そのものがもう一度再教育を受けて、そこの真剣さというのが、ある意味では学問に対する真剣さにつながってくる。十八歳人口の減少の問題もありますけども、社会人を入れること自身がむしろ大学の活性化につながっていく、あるいは授業自身に対する学生の興味といいますか、そういうことも少しずつ変わってくるんじゃないでしょうかね。

橋本　もちろん大学の改革をどうするかという問題は、入試を考えるについても根本的には教学といいますか、教育内容そのものを基礎にして発想していかねばなりませんが、しかし一方、経営的に考えれば、おっしゃったような十八歳人口が減る中で、社会人入学というのはずいぶんふえてくるんじゃないかなと思います。

郡嶌　そうです。

御牧　工学部なんかは、学部のほうに社会人を受け入れるという形は非常に難しゅうございまして、現実に社会人の方の場合は、企業である程度エンジニアとして働いてこられた方は、もう学部のレベル以上になっていらっしゃいます。むしろ大学院に来ていただくというほうがいちばんいいだろうと我々は思っていましてね、大学院には今度そういうシステムを、社会人のものをつくりましたし、学位についても文部省から学位を社会人について出しなさいという、それについても間もなく決定しますしね。学生というか、その前の説明会その他でいちばん興味をもたれたのは、飛び級制を工学研究科はやったということですね、三年生から。

橋本　法学研究科、神学研究科、アメリカ研究科がやはり飛び級で在学三年から入れる制度を採り入れました。その場合に英語、ドイツ語などの入学試験の科目を、ＴＯＥＦＬとか何とかですでに能力があるということを客観的に証明されるならば、試験を免除する制度になってますけれども、大学院の入試でそうなっているのであれば、学部の方だって、英語のよくできる学生は英語の試験の免除を採り入れたっていいんじゃないでしょうか。

御牧　構わないと思うんですね。ある資格ですからね、ああいうものは。何かですぐれているのがわかったら、そのまま試験なしで入れてもいいなという議論は出てくるだろうと思いますね。

森田　社会人入学の件ですが、総受験数は減ってますけど、女子の進学率はどんどんふえてますよね。ですから以前に高校を卒業して大学に行かず、現在、働いている、あるいはもう結婚している人で、もう一度大学へ行きたいという希望は潜在的にかなりあるだろうと思われます。ですからそういう道を開くことは可能なんですが、女子大学というのは、なんか一つ閉鎖的な社会ということがありますよね。そこに一種の異分子を持ち込むことになりますから、これが本当にいい意味で活性化につながるが、逆のいろんな心配というのもないわけではない。たとえば保護者の方からの注文があるかもしれない。今の学生は存外しっかりしてますから、やってみたらあまり問題はないのかもしれないんですが、社会経験の差が、十八歳の女性と、二十五、六歳なりの女性の差というのは相当ありましょうからね。

中村　先ほど郡嶌先生が出された、従来十八歳から二十二、三歳が対象ということに対しての一つの危惧、もっと広げるべきだとおっしゃったことに対する一つの危惧だと思うんですけどもね。もとの問題に戻るかもわかりませんが、いまの社会人入学の問題とか、それから大学が生涯教育に対して対応していくべきだといった要請が言われているわけですが、その場合、入学者を受け入れるときに、いまの一般入試で試されているような学力を本当に求めているのかどうか、それがないと大学での勉強は本当に無理なんだという判断ではないと思うんですね、実際は。社会人に入試をやるとき、たとえばこのレベルであれば十分ついていけるという目安は、実は一般入試のボーダーのラインでみんな想定なんかしてないはずです。あれの何ポイントか下でも本当はちゃんと学校へ入って、勉強する気さえあればやれるはずなんだという前提に立っているから、そういう制度が考えられているわけでしょう。そうすると、いまの一般入試自身ももう一ぺん考え直す必要があるんじゃないかと思いますね。

郡嶌　今まで世間が一般入試がいちばん公平だということもありますし。

中村　客観的公平ですね。

郡嶌　客観的公平ですね、それからもう一つは、中村先生がおっしゃったように、うちの大学から言うと、効率的で、まあある意味では……。

橋本　入れやすい。

郡嶌　そうなんですね。そういう考えが合意としてあったと思うんですよね。推薦とかいろいろな多様な入試をやることによって、客観化、相対化されていくことによって、初めてこういうものもある程度認知されてきたところがあります。

中村　ぼくはとにかく一つの方法に全面的に依存するというのが望ましい時代というのは終わったと思うんですね、はっきり言って、できるだけ四つ、四つよりは六つ、そういういろんな選抜の方法、その中には推薦もあるし、推薦でない自己出願もあるし、いろんなものを並べて、その中でお互いに競い合わしていくとかね、制度そのものを。そういう時代に入っているんじゃないかと思います。

郡嶌　しかし単に成績だけ、学力だけの評価だけではなくてね。

中村　そうです。評価だけではなくて、四年間どう過ごしていくかということも含めましてね、商学部ではSPをやってますけれども、SPについてもおおむね成果は良好だというふうな判断ですね。もちろんこれも言ってよいのかどうかわかりませんが、全員が四年間で卒業できるかどうかという点では、問題も抱えているのですけれども、少なくとも最近の傾向を見ていると、授業にはいちばんまじめに出ているんじゃないですかね。で、一生懸命頑張ろうとしている。その点なんかは、いまの段階ではおおむねプラス評価をしていいんじゃないかというふうに考えますね。

橋本　そうですね。

郡嶌　その点では最初の話しに戻りますけれども、こちらがいろいろ改革をやっても、最終的に高校側の態度というのが、なかなか変わりにくいといいますか、固いといいますか、学力中心の指導というのは、保護者にやっぱり説明しやすいんでしょうね。同じ推薦でも、我々の場合、推薦選抜のときに高校側に言ってますのは、たとえば学力Bランク以上でいいですよと。その場合にたとえば評定平均値が三・五と三・七の人が出てきたら、その段階でそれは二人ともBランク以上ということで認めて、あとはほかのもう一つ言っております課外活動であるとか、個人の研鑽であるとか、そういうところでもう一度評価してほしいということを言っても、たとえば二人のスポーツが陸上とそれからほかの競技になりますと、全く判断がつきにくいから、結局、三・七と三・五という形で判定されてしまう。それは御破算してくださいと言っていても、なかなかやっぱり保護者に説明されるときも、ずいぶん大変みたいですね。

橋本　それはそうですね。大学の評価とか序列とかいう場合には、偏差値でいくらの学生が入ったからとかというふうな尺度のほうがはかりやすいですから、どうしてもそうなると思いますよ。一方しかし、そういういわゆる一芸一能といいましょうか、そういう多様な能力を持った者が入ってきたときに、それを今度はこちらでもってどういうふうに受け入れ、その能力を伸ばしてやることができるかの問題もありましょう。

御牧　そうですね。結局、推薦でも何でも

入ってきた人たちをその後どういうふうに育てるかというのがちゃんとしていないと、その入れ方をうんぬんしても本当は仕方がないんですよ。いくらいい人が入ってきても、あとの受け皿がちゃんとできなかったらだめですからね。いまの先生がおっしゃっているとおりでして、一芸に非常に秀でている人を、そのときは秀でて入ってきて、それを本当に伸ばせるかという自信があるかどうかですね。そこまで教育できるかどうかというのがいちばん問題だと思いますね。だから入試そのものを学校の宣伝に使っては本当はいけないんですよ。だから受け皿をちゃんとして、それで入試をやって、それが宣伝になったらそれでいいんです。受け皿はちゃんとしてますから。それをしないのに、入試だけきっちりやったって仕方がない。これは絶対避けなきゃならんと思いますね。そうしないと大学の評価はそこで一気に落ちてしまいます。数年たったら。

中村　商学部でも実は検討した時期はあるんですけれども、そんな問題もありまして、個人的には、これは終わったという判断ですね、こういう制度は、一芸入試というのは。

郡嶌　しかし、ある意味ではリベラルアーツ的なところにおいては、意外とそういう人たちを入れていくというのはできるかもしれないですね。明らかに工学部みたいに一つのプロフェショナルな形の技術を持った人間を養成しているのに、はたして文学の才能がどれだけ生かされるかというのは、ちょっとわからないような気もしますね。やっぱりそれぞれの学問の持っている性格、そういうものも検討しながら、そういう制度が出てくるような気がしますね。

森田　先ほど女子大学推薦で一つ言い残していることがあるんですけども、建学の精神のキリスト教主義というのをいかに生かすかというのが問題でして、それを確保するというか、その推進者になってくれるような学生を若干名ですけど、推薦入試の枠で設けてやっているわけなんです。全学で約十名ぐらいなんですけれども、キリスト教学校教育同盟加盟校について一名推薦できるという形でやっています。そういうので入ってきた学生はキリスト教の信者ですので、礼拝とか、それから春や秋のリトリートとか、そういうもののリーダー的な役割としての活躍もしてくれていますので、そういう意味では建学の精神を生かす一つの推薦の枠かなという気はしているんです。学力面の問題もあって昨年から学力試験も加味するようになりましたがね。

郡嶌　しかも、それを学内高校ではなくて、学外高校でなされているというのもすごいですね。

学内高校からの推薦入学

郡嶌　学内高校に私の学部は非常に不満がございましてね。つまり一貫教育の中でやられている学生ですから、そういう面から言うと、うちの学部はむしろ学力の高い者よりも、次第にそういう形のを入れて学部の中を活性化していこうとしているわけです。その核になってくれるであろう学内高校というのはなかなかうまくいきませんでね。その中でも国際高校出身の学生なんかは、ＡＫＰの交換留学制度なんかにかなり積極的に応募してくれたり、それからゼミの中でも活発に議論を、あるいはリーダーシップをとってくれています。同じ学内高校でもずいぶんそういう面から言うと、多様性が出てきているみたいな気がするんですね。そういうところがあるかと

思うと、片方では大体四月ごろ、うちの教授会で問題になるのは、学内高校は授業でうるさい、おしゃべりばっかりしているというようなところがありましてね。

中村　全部オフレコにしないと本音が出てこないんじゃないですか（笑）。

御牧　学内高校に対しては、ぼくはオフレコは必要ないと思います（笑）。言うべきだと思いますわ。特に工学部の機械系では資格試験というのをやっておりましてね。これは学内高校から非常に反発を受けましたけれども、現実に学内高校から上がってきた人のうち工学部の学生としてついてくるには、あまりにも学力が低いという人が幾らかいたわけです。それは引き受けた以上は卒業させるという義務が我々にありますけれども、それを果たせないようなレベルですから、やっぱりちょっと問題があると。そのために資格試験をして、最低限はこのぐらいの学力、それも基礎学問だけですから知っておいてもらわないと困るのだと。実際に工学部の機械系がやった資格試験というのは、生徒さんに対しての警告ではなくて、むしろ高等学校の先生に対する警告だったのですね。ちゃんと教えてくださいよと。ものの現象だけを定理だけを教えるのではなくて、その流れを教えてもらったら、定理は知らなくても本質的にものはわかるのだと、その流れを学内高校は受験校と違うから教えてほしいと。受験校だったら定理を教えて、そこからそれの応用を教えてもらうということになりますからね。その基本だけはやってほしいということがスタートだったのですが、ある程度無視されたといいますか、それが何年か続いたために、やっぱりやらざるを得ないと。大学に入って、ある高校からの学生は一〇〇％留年をしたこともありました。四年生で卒業できない。これは工学部としてもやっぱりちょっと問題があるということでしてね、特に機械系はそういうことで試験をしました。それに対して高等学校のほうで対応をされてきまして、ずいぶん改革されてきました。大体同志社の場合は、学内高校のほぼ一〇〇％近くが入ってくるというのは異常でしてね、これは全国的に見ても。だからそれにやっぱり甘んじてもらってはいけないと。すぐ信頼関係という話が出てくるんですけれども、それを取り返そうとすると、一貫教育のメリットといいますか、を生かしてほしいと。

一貫教育って何かというと、私自身、はっきりわからないんです。いま学内高校の教育を見てますと、普通の高等学校とカリキュラムは同じですね。そうすると何が違うかというと、何も違わないです。課外活動もやっているし、だからその辺がどのように高等学校のほうで把握されて一貫教育というのを、概念を確立されているのかというようなね、我々に伝わってこない。それで生徒そのものは素質はあるわけです。絶対素質があるのは間違いないです。だからそういうのを見てますと、学内高校の人はできるだけ入れたいなという気はありますけども、ドロップアウトする人も出てくる。そうすると、やっぱりある線は引かざるを得ない。

橋本　その資格試験というのは、一年生に入ったときにやるわけですか。

御牧　いえいえ、高等学校三年生の十一月ぐらいにやりました。最初は教授会でちょっと問題になって、翌年は資格試験で五人、去年も五人ほど落としました。これは無理だと。非常に簡単で高等学校の先生自身がこの問題はやさしいとおっしゃるのを零点で来ました

からね。これはちょっといろんな事情があって、ちょっとなめられていたというのが。だからもう少し、そういうことはなくしたらいいのかもしれませんけど、やっぱりいまの現状だと継続せざるを得ない。

郡嶌　学内高校の推薦問題と、それからほかの推薦を含めた入試の問題になると、必ず問題になるのがそこでしてね。つまり受験戦争にいろいろな弊害があるにしても、最終的に彼らはそれはそれなりに一生懸命学力で競ってきているから、英語にしてもかなりのレベルに、大学に入る段階までは恐らく学内高校よりもかなりの段階でして、そういう面では劣っている。そういう面では一概に一般入試を否定することはできないと。そしたらそれだけのレベルであっても、それに代わるものとして、たとえば課外活動であるとかそういうことを学内高校の要求すると、そこについては個性的な教育については、先生方が頭を抱えられるような、そうすると中途半端な学生ばっかりで、恐らく高校なり中学に入ってくるときには非常に能力があった人間が、結局その後の受験という競争がないために、そのままの形できてしまうという形で受け入れざるを得ないというところに、なにか一貫教育の一つの逆に弊害的なもののほうが出てきているようなところが、うちの学部で学内高校の推薦を変えるとき、あるいはそのほかの検討をするときには、必ず一般入試のメリットとして出てくるのがその対比ですね。それなりに一般入試もそれだけ学力で競争してますからね。それだけでも忍耐力がついているのだと。そしたら忍耐というのも一つの能力じゃないかという(笑)。それだけの忍耐をつけてくるというのは、ちゃんとしたこれは個性のある人間だという評価になるわけなんですがね。

中村　だから根本的な問題は、一貫教育が高校の教育をゆがめない、こういうメリットは確かにあるんですね。じゃ逆に、一貫教育は大学の教育についてどういうメリットがあるのかという(笑)、そこのことをやっぱり考えなければならない。たとえば一貫教育を通じて大学に進学してきてくれた生徒諸君が同志社の核になって、建学の精神を体現するような学生生活を送ってくれているか、そういう事実があればね、要するにそういう形で来た学生が大学にとってどういうプラスアルファを持っているのかというところは、一貫教育について論議される際に、いちばん抜けているポイントじゃないかと思うんですけどね、本当は。

郡嶌　悪いことばっかり言ってますけど、学内高校が、よきにつけ悪しきにつけ、同志社大学に対して持っている意味がある。学内高校の生徒は大部分が同志社大学を第一志望にしている。そういうのが核になってきてくれていると、いいのですが。そういう面で大学自身が一つのアイデンティティーを持ち得るという可能性は非常に強いので、彼らが本当に大学に行って、使命感を持って、そういう形で動いたときには、同志社として一つの意味のあることになるだろうと思うんですね。ぼくはいまのとこはまだそういうとこまで形成されてないような気がするんですよ。そういう面から言うと、やっぱり学内高校の推薦というのは非常に重要な役割を、同志社大学のアイデンティティーを持つためには重要だという気がしますけどね。

中村　学内高校を対象として推薦選抜をやったら怒られますかね。不本意入学というのは学内高校にもあるわけでして、じゃ、定員

をいまのところから少し削減しまして、残りの定員枠についてはどこからでも受けてくださいと、それを選抜でとりましょうと、そういう形で競争原理を持ち込むような制度をやったら、受けてもらえますかというのは、逆にぼくらから増員要求が出るときに言いたいことですね、本当を言いますとね。怒られますから、これはあまり声高には言いませんけれども（笑）。

御牧　それは言われてもいいんと違いますか（笑）。

郡嶌　と思いますね。本来、これは学内と言っても、推薦入試ですからね、入試というのは選抜を含んでいるわけですから、全員受け入れというのも入試の体系としてあるのと同時に、選抜というのもあるんだったら、それ自身を学内高校の入試として導入してもちっともおかしくないと思いますね。

御牧　特に学内高校の場合は、一貫教育のメリットというのがあんまり出てきてないようでしてね、むしろ一貫教育の中で余裕がありますから、集中力さえあれば、遊び一方でもいいんですよ、するときにしてもらったら、こちらのほうで入ってしまえば、何らかの対処ができると思うんですけどね。それが非常に集中力がなくなって、だらだらしているというのが全体的な感じなんですね。

郡嶌　入試全体に関する問題だと思うんですけども、我々がいま一年生段階から教えていくときに、どうもこのごろの学生は、たとえば論文を書くとか、あるいは口頭で発表する時に、感想文になってみたりする。そういう面での基礎的な学力が非常に抜けているようです。むしろ知識的なものはかなり豊富に蓄えてきてますけど、発表する能力というのがどうもないと、したがって、そういう教育も学内高校だと、ある程度できる気もしないでもないんですけど、これは一般入試の中で入ってきた学生も必ずしもそうじゃない。それで推薦入学のほうで論文を課すような形になる。これはまたそれで受験テクニックとしての論文になってしまってましてね、本当に自分のユニークな形になってない。だから本当に必要なものがどうも試されないで入ってきて、四年の段階でゼミ論文を書かしても一から指導していかないと、というような問題がずいぶん積み残しで大学に来ているんじゃないかなと思います。

入学試験検討委員会の必要性

橋本　そうですね。こういうふうに非常にざっくばらんにお話ししますと、いろんなアイデアが出てくる。ところが、いま大学にある仕組みとしましては、入試実行委員がありまして、それはさしあたって二月の一般入試の問題をつくって、試験の運営をやるということだけでもう手一杯で、それをどうやって変革していくかというような、そういう検討委員会の必要が感じられながら設置されていない。いろんな多角的な面から考える必要があるんじゃないでしょうか。

私、一つ考えているのは、話がそれるかもしれませんけれども、七月ぐらいに入学試験をやったらどうだろうか。浪人の敗者復活戦みたいなのをやって、九月入学にして、セメスター制をもっと大学全部が導入して、語学にしましても他の科目にしましても、通年制でいける科目もあるかもしれませんけれども、セメスターでやっていく、そうすると、飛び級というのがもっと生きてくるんじゃないかというようなことも考えたりするのですけど、そういうことを検討する委員会が設置

されると、もっと活発になるんじゃないかなと思います。

御牧　同志社ぐらいじゃないですか、全学的に統一した委員会がないのは。他の大学は全部持ってますね。だから非常に対処が早いですし、それから情報収集能力がありますね。同志社の場合は入試課ぐらいですから、情報収集能力は悪く、小さい。それと同時に、各学部へ流す情報量も少ない。だから検討がおくれる。その悪循環がずっときているわけですから、これは同志社大学というか、同志社全体の、女子大学も含めたところで、一つの委員会をつくって、女子大学と大学とがまた別々のその下部組織をつくるというように、そういう委員会はぜひ必要だと思いますね。これは絶対に我々としては置いてほしいなというふうに、検討していて痛切に今年感じました。

橋本　神学部では今度、推薦選抜入学を設置しましたが、各学部でばらばらに手探り、暗中模索で改革を試みているようです。そういう点での情報交換だとか、アイデアの提供をいただければと思いますね。

郡嶌　しかも、これ、一つには我々は教育理念のほうから考えていかなくちゃいけないと思いますけど、もう一つは、先ほどから本音の部分のところで、経営上の問題もありますという形の問題もありますので、そういう幾つかの分科会みたいな形で、いわゆる同志社全体として、いろいろな多方面から検討していくというのは必要だと思いますね。

中村　いまは一般入試についてだけ実行委員会をつくって、あとの推薦入試とか、その他学内高校、こういうものは全部各学部専決で独自におやりくださいということになっている。このシステムはあんまり長くはもたないんじゃないかな、今の状況がずっと続いていけばね。遠からず全学的な入学制度の抜本的な洗い直しと、そのための何らかの機関をつくっていかないと、恐らく急減期は乗り切れないと思いますけどね。

橋本　いろいろと実情やアイデアをたくさん提供していただきまして、どうもお忙しいところをありがとうございました。

（一九九一年七月二十二日収録、於有経館担当理事室）

同志社談叢　第九号

論　文

新島襄の大学設立運動（一）……河野仁昭
明治初期岩手県の同志社人に関する新資料……高橋光夫
高橋元一郎ノート……室田保夫
―詩・社会事業・平和そして祈り―
徳冨蘆花と「今治英学校」……竹本千万吉

資　料

同志社職員異動表……
―明治二十五～二十七年度―
新島襄に関する文献ノート（その七）……河野仁昭
―著者・筆者別―

（頒価一、〇〇〇円）

発　行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五）―二五一―三〇三七・八

〔座談会〕その二

入学試験・教育環境を考える

――中学・高校を中心に――

濱中　雅男
（中学校教諭）
平山　光一郎
（女子中学・高等学校教諭）
今井　一宏
（国際中学・高等学校教諭）
清田　泰朗
（香里中学・高等学校教諭）
西岡　茂
（高等学校教諭）
司会　山中　俊夫
（大学法学部教授）

はじめに

山中　昨今の進学人口にかんがみますと、中学・高校それから大学が一つの共通の問題、すなわち進学人口の減少という問題を抱えていて、特に中学・高校では大学よりも数年早く経験しなければならないと言われております。あわせてこのことは、一方では中学・高校がいかにして良い生徒に入学してもらい大学までの一貫した教育の中でその成長を見守るかという同志社としての課題を生みます。また、他方において、進学を希望する側には、どの中学へどの高校へ進むかについてかなり選択の幅もあたえられてくるということにもなり、中学・高校では教育方針とか教育環境とかについてそれぞれに個性化が問われてくるという課題も考えられ、そういう状況は一般的にはすでに現れてきているのではないかというように思われます。

同志社の場合については、大学と女子大学を頂点として共学・女子教育の方向でのいわゆる一貫教育の体制がとられているわけでしょうが、言うところの「良い生徒」――この場合、なにを指して良い生徒と考えるのかと

いう問題をも含めて――にどのようにして中学・高校に入学させるかという入学試験に関連する問題と、そして、どのような教育方針・教育環境の下で生徒の個性を伸長していくかという問題があろうかと思います。今日まで、わたくしども大学の側から見ておりまして、中学・高校ともに社会的にも非常に高い評価を受けていらっしゃるわけですが、生徒の激減期に向かって抱えていらっしゃる問題などをも含めて、その辺りからでもお話しいただきましょうか。

入学試験の目指すもの

今井　国際中学・高校は、帰国生を受け入れる専門校という性格上、他の中学・高校とはかなり事情が違う面があります。入学試験も以前からいろいろな種類のものを行っております。帰国生と申しましても、海外で現地の学校にかよって現地の子供と一緒に生活をしてきたものもいれば、日本人社会に住んで日本人学校にかよっていたものもいるわけです。前者、つまり異文化とじかに接触してきた生徒たちが、本来の意味で本校が考えている帰国生像なのですが……。

それゆえ帰国生対象の入学試験には、現地校出身者を主な対象としたもの――現地において習得した言語による小論文・面接・海外の学校での成績による判定――と日本人学校出身者を主な対象としたもの――教科試験による判定――があり、さらに入学定員の三分の一にあたる国内一般生徒に対する教科試験がこれに加わります。

さいわい、わたくしどもの学校には高得点を取る、言い換えれば偏差値の高い生徒がきてくれているのですが、反面では入学した途端に勉学意欲を失ってしまい、大学へは推薦できなかったというものが毎年少なからず出てきています。合格することだけのために塾で勉強をしていてその目標を失ったもの、自分の意志で学校を選んだのではなくて、塾の指導でこの学校を受験したもの、問題はどうやらこのあたりにあるようです。

山中　入学試験に関連して、早速に塾の問題が出てきましたが……。

今井　塾の影響あるいは弊害は、国内だけではなく海外にも及んでおりまして、アメリカの日本人の多い地域では小学校四年生以上の子供の七割以上が週二・三回塾にかよっているようです。その影響は教科試験だけでなく、現地校出身者のための試験である小論文にもあらわれてきており、最近では、以前のような感受性豊かな論文が減ってきています。せっかく海外にいながら異文化から切り離される、異文化と接触する時間がもてないというのは本当に残念なことです。

山中　それに対応した方策は、考えておられるのでしょう。

今井　一九九〇年の末に、初めてロサンゼルスとニューヨークで海外入試を行いましたが、それにふみきった理由の一つが塾の影響への配慮なのです。一二月に入学試験を行って合格者を決め、現地校の学年末の六月までの半年間を現地での十分な異文化体験に費やして日本に帰ってきてほしいという願いがあるわけです。

山中　生徒の個性的な海外体験とそれに歪みを与えかねない塾の影響というお話しですが、「きてほしい生徒」と「来れる生徒」というように分かれてしまう……問題としては「入学させたい生徒」とはということになりましょうか。

濱中　「入学させたいと願う生徒」という

濱中　雅男氏

平山光一郎氏

今井　一宏氏

のは、それぞれの学校であると思いますが、現実は入学試験という一律の物差しで切ってしまっているわけですから、必ずしもその「願い」がかなえられているかどうか分からない部分でしょうね。

ところで進学人口が減ってくるという点については、わたくしどもの学校でも気にはしているのです。生徒数三二〇名あたりですと学校としても財政的な面で安定するわけですから……今年の九一年度生に関しては受験生も多く定着率もここ五・六年間変わらず高いという傾向で、入学してからの外部受験も少ないようです。これは、同志社が中学を門として高校・大学とつながった一貫教育体制にあるという社会的なメリットが大きく影響していると思うのです。ですから、中学では今年度の入学試験の結果を見た限りでは減っていないので、今年は安心だったなという話しでおさまってはいるわけです。

山中　一貫教育という同志社固有のメリットがでましたが、教育方針というか教育環境の面での独自性というか個性化といった面はいかがでしょうか。

濱中　中学の場合には、個性化といっても本校を希望して入学してきた場合、高校・大学へと進学して行くわけですから、結局、学力の問題にかかわってきます。学力レベルにプラスして個性化――特色ある教育ということになると、たとえば中学を特色豊かにすることによって受験生が増えるという保証があるか、という問題になると思うのです。むしろ同志社大学や女子大学が非常に特色あるということで中学から入ってくる、あるいは、中学から大学までの十年近くを同志社で学ぶという同志社ならではの一貫教育という特色にあこがれて入ってくる、というのが多いと思いますね。生徒から受ける感触もそういうところにありますね。同志社を選んだという理由も、全体としてみるとお父さんお母さんが同志社出身の方であったりするとともに、いくつか接している範囲では、同志社へきて自由でゆっくりした雰囲気にあこがれてきているという生徒からの感触というか印象が強いですね。

山中　確かに同志社の場合には、学園的な雰囲気というか自由な雰囲気というものがあって、それにあこがれてきているという部分はありますね。今のご発言に「大学を頂点と

山中　俊夫氏

西岡　　茂氏

清田　泰朗氏

した一貫教育の中での中学・高校の役割」というものがありましたが、もし一貫教育を前提とするなら、それだからこそ中学・高校は、特色のある自由なカリキュラムおよびエクストラ・カリキュラムを編成すること、いわゆる個性化が可能になるのではないのでしょうか。それが受験してくる側にも大きな魅力となるということにも連なるという部分もあると思うのですが……。

西岡　「どういう生徒に入ってほしいか」という問題が山中先生の言葉には含まれていると思うのですが、わたくしどもは、テストで非常に良い成績をとった子供を入学させたいという気持ちのみでなく、むしろ基本的な学力をちゃんともっていて、他のいわゆる受験校ですることのできないエクストラ・カリキュラムを自分自身でこなしていける生徒を期待しているのです。同志社大学が目の前にぶら下がっているというだけの考えで入ってきてもらっては困る。学校としては、もっと積極的に受験校にはないこのゆったりした時間を有効に活用して学園生活を送ってほしいと考えております。勿論、入学試験は選抜試験ですから成績順にとることになりますが、自由な時間を活用してもっといろいろな面で能力を発揮する、自分なりの目的を持って邁進するという生徒に来てほしいなと思っているのです。

山中　中学から入って大学へ進んでくる場合には、高校・大学に向けての受験の禍いからはまぬがれているわけですからね。自由な時間を活用できることは大きな財産でしょうが、現状はいかがですか。

西岡　先程来のお話しにも出ておりますように、塾での受験指導といったものが最近特に徹底して入ってきているな、という印象をもちますね。だから生徒は、とにかく入ることを目的にする。入ってしまったら目標を失う、気力を失う、目的を持たない、個性がないというような生徒が、ここ四・五年多くなってきましたね。

わたくしどもの生徒は、ほとんど同志社中学から上がってまいりますが、それ以外に毎年九〇人前後の学外入学者があります。この生徒たちが同志社中学からきた生徒たちに対する刺激となってくれればというのがわたくしどもの期待していたところなのですが、最近では、塾での輪切りの指導とでもいうので

しょうか、その影響のために先程申しあげたような主体性喪失、個性喪失の傾向が生れ能力を発揮できないでいる生徒が出てきていると思います。

塾のプラス・マイナス

山中　塾の弊害が問題になってきましたが、対抗策といったものはないのでしょうかね。

西岡　これに対する方策はなかなか得られないのですが、このような生徒を三年の間にどのように育てるか、という方向に力を向けざるをえないですね。

平山　女子中学・女子高校についても同じようなことが言えるのです。最近では、有名大学・女子大学へ推薦で行ける中学・高校への入学希望と、特別進学コースとか受験指導をしている中学・高校への入学希望とが多いわけです。同志社の場合には生徒にも親御さんにもその希望にぴったりのところであって、わたくしどもの学校に入るために非常に早くから塾へ通って努力をしているのですね。

しかし、どうしても塾へ通って入学してきた生徒たちは、成績優秀という学力だけはあるけれども、集団生活・学校生活をどう過ごしたらいいか、参加したらいいかということができない・分からない生徒が増えてきています。

山中　ある高校の先生に伺った話ですが、高校生が校内で水鉄砲で遊んでいる。「お前たち子供みたいになにやっているんだ」と言ったら「こんなこと塾へ行っていたからしたことがなかったんや」という返事が返ってきたというのですが、子供の「遊び」の中での体験が欠けているとでもいうのでしょうか……。

このあたりで「入学試験に合格できる生徒」と「本来の意味での優秀な生徒」というのか「きてほしい生徒」というものとの違いが出てきますね。

西岡　今の「本来の意味での優秀な生徒」というのは、山中先生の場合どのような意味で使われておられるのでしょうか。

山中　たしかに入学試験の場合、試験答案の中でしか優劣はつけられないでしょう。しかし、塾での指導の場合には、例えば国語の文章問題で文意をまとめる問題の場合にも、キーワードを探せと指導する。採点する側は、キーワードが書かれていなければ落とす。しかし、その生徒が文章を必死に読んで作者の心を掴んで書いても、キーワードが書かれていなければ落とされる。採点も塾に傾斜しているかどうかは分かりませんが、「試験に通った生徒」が「良い生徒」とは呼びにくい面もある。先程の「きてほしい生徒」像にも関連すると思うのですが……。

濱中　「入学させたいと願う生徒」像という前提にたって考えれば、わたくしどもの学校でも、推薦制を生かして自由にのびのびと個性の伸長をはかってもらいたい、ということは常に考えます。しかし、それを期待して入学試験ができるかというと、現実にはそれは無理ですね。

試験問題を作る時の大前提として「できればこういう生徒を選びたい」という発想のもとにそれぞれの教科で試験問題が作成されるわけです。算数の問題ですと、単に計算ができるだけではなくちょっと応用を加えた問題を出して、それが解ける生徒が入ってくれればと考える。わたくしの担当している図工の場合でも、むずかしい問題を出して落とそう

としているのではなく、生徒の日常体験の豊かさとかを知るための問題なども作成するわけです。ところが、塾のほうが一枚上手で、今年の傾向をふまえて次の問題を予想するという具合に先取りをされてしまう。わたくしどもとしては、入学試験の段階で、せめてこういう生徒をとりたいと考えても、その上手を塾がいってしまうという現実があるのです。そうすると、先ほども出ておりましたように「入学試験をくぐり抜けてきた生徒をどのように育てていこうか」という発想でせまることが重要になるわけです。

この場合、生徒の個性伸長というときには、わたくしどもの学校ではカリキュラム以外に生徒会活動を重視して、学園祭などの学校行事を通じて生徒が前面にでて主体的に取り組む姿勢を育てたいと考え実現してきております。また、夏休み自由課題研究などもその一環なのです。しかし、他面では、高校・大学へと進むのに必要な基礎学力はしっかり身につけてほしいということがあって、個性の伸長の必要性ということと衝突するという限界もあるのです。

山中　一貫教育という枠組みの実効性という面からもむずかしいのでしょうか。

濱中　やはり学力の問題と衝突をして、独自に特色あるものをつくりだし実行できるかというと、やはり限界を感じますね。研究の余地はあると思うのですが……。

山中　中学校における塾の弊害のようなものはいかがでしょうか。

濱中　塾の弊害のひとつとして思うのは、答案用紙を平仮名で書く生徒がでてくることですね。漢字で書いてペケになるよりも平仮名で書いてマルのほうがいい、というわけです。これは徹底した塾の指導だと思います。

山中　先生方は試験をするときに、「漢字で書け」という指定はされないのですか。

濱中　わたくしの教科は技術ですからしていませんが、漢字で書いてちょっと間違っている場合には点をやっています。平仮名一辺倒で書くより少しでも漢字を覚えてほしいと思いますからね。

今井　わたくしは数学を担当しているのですが、塾で「途中の式は消せ」と指導されてきた生徒がいます。定期試験の答案を見ても、一旦書いた式が提出時には全部消してある、答しかのっていない。そういうものが見受けられます。

山中　そこまでくると「勉強」とは一体なんなのでしょうかね。式（考え方）はあっているが計算ミスでたまたま答えが間違っているとき、先生としては評価もできないわけですか。

濱中　生徒数の減少と生徒のレベルの点ですが、今年の中学入試の合格最低点は下がっているので、悪い生徒がきているのか、それが生徒数の減少によるものなのか、はたまた個性的な生徒がきてくれているのかというあたりが、ちょっと気になっているところなのです。しかし塾の輪切りにもかかわらず、わたくしどもの学校へきたいという生徒がきていると信じております。

平山　塾の主催する説明会には、わたくしども女子中学・高校は参りませんし、同志社高校もいっておられないと思うのですが、出席しないというと非常に失礼なことを言う塾もありますね。それだけ塾主導型なのでしょうかね。

濱中　今までは学校のほうが主導権をとっていて塾がお願いにきていたのですが、最近では塾のほうが「おたくの学校には生徒を送

りませんよ」と言っているというようなことも聞いたことがあります。

平山　それから、先ほどの個性の伸長に関連する点なのですが、最近の交通の便利さから通学範囲が芦屋・宝塚というように広くなってきている。ありがたいことなのですが、それでつぶれてしまう生徒も出ますし、クラブ活動・生徒会活動に参加する時間的な余裕がないと言うことにもなるのです。また、体力が非常に落ちていて、忍耐力にも影響してくるという問題もあります。

個性の伸長と一貫教育

山中　今後、生徒数が減少していく環境がきびしいものになればなるほど、塾の主導性はますます強くなりそうですね。そうなると試験に通る生徒はくるが、カリキュラムの面、特色あるカリキュラムの実行の面でも手当てすることの大変さもあわせて出てくる。中学の場合、小学校からの推薦入学などは考えられないのでしょうかね。

清田　実際には難しい部分が多すぎるのではないでしょうかね。高校のほうが実現性があるのではないでしょうか。

山中　高校の場合には、生徒会活動・スポーツなどのクラブ活動、スペシャリストなどの条件もいれて中学・高校に受け入れる判定材料にすることはできませんかね。

濱中　聞くところによりますと他県の現実の例では、高校受験に当たって中学校の内申書を重視するということになると、その内申書を上げるための指導を塾がおこなうということになり、かりに入学試験成績五〇パーセント、内申書五〇パーセントだとすると、内申書五〇パーセントを得るためにその学校のカリキュラムに沿った宿題、課題をすべての面で塾が支援していくということがあるそうです。小学校にまで及ぼせば、今度は推薦入学学力を支援するという形で塾が介在してきますね。また、小学校の段階で人物評価をすることはむずかしい。中学の場合には、先ほど申したように、やはり入ってきた生徒をどう育てるかのほうが大きいと思いますね。

山中　生徒の急減期の対策について実感があるかどうか、そして、塾による培養のない生徒を入れるかどうかの問題を前提として、高校の場合には推薦入学制度は採りうるわけでしょうか。

清田　塾の在り方にこちらが対応していく姿勢は必要なのでしょうが、いろいろ言われながらも現実にどのような制度を採るかというところで行き詰まるのですね。ほかの学校も同じだと思いますが、いまの制度にとって代りうる平等・公正な試験制度というものが見つからないという現状で止まってしまうのですね。

今井　わたくしどもが帰国生入試で行っている小論文・面接という試験方法は、生徒の能力や個性をみるのに大変よいものなのですが、これをすべての受験生にまでひろげるのは何よりもまず物理的に不可能でしょうね。

平山　やはり今までの話しにでていたように「入ってきた生徒をどのように教育し指導するか」を中学・高校は考えるということでないと仕方がないようですね。わたくしどもの遅ればせながら四〇人学級にして先生の目が一人一人に十分行きわたるよう・指導できるようにしていきたいと思っています。教育の充実を図るという面から考えております。

濱中　入学試験を通ってくる生徒は、力のあることは事実です。問題は、その力を持続できない要素がどこにあるか、ということな

んですね。入学してからちょっと一休みということになる。三年生になって推薦にかからなくなるおそれが出てくると必死になって取り戻してくる、という底力のようなものはある。

塾の弊害を一方では考えますが、わたくしどもがやっている入学試験をクリアしてくるのは凄い力だと思いますよ。こちらとすれば基礎学力につながっている面もありますから塾に助けてもらっている面もあるというわけですね。

西岡　塾の弊害のひとつに「中学の受験は親の受験だ」という言われ方が世間にある。ですから、そもそも自分でこれをやっていこうという積極性が生徒には見られない。自分の考えで歩ける生徒を求めますし、そういう生徒を育てたいと思うのですが、「つぎ何をするのですか」と待っている生徒が多い。自分から課題・問題を探して解答を得よう・研究しようというところが全然ないんですね。これが大学までずっと続いているのかなと思うと心配になります。

山中　成績ということになると女子生徒の成績が非常に良いようですね。真面目・生真面目というのか、男子生徒・学生とは違った一面がありますね。

平山　女子生徒の場合には、決められたことはきちんとやりますのでねえ。

山中　予習とか復習はしっかりやりますね。

平山　そうなんですね。だから普段の成績などはいいんです。ただ、自分で考える力、自分で切り開いて行動するという力の点では比較的苦手だと思いますね。その苦手意識をなくすよう努力するのですが、先ほど申し上げた通学範囲の広がり問題などがあってもう一つ実効性がともなわないのです。

清田　わたくしども男子校としても生徒の積極性の伸長を担うことが必要なのですが、男子生徒の場合、中学へ入って一・二年はなんとなくうろうろ模索しているようです。そのうちにその子の個性のようなものが現れてきて、ぐんぐん伸びる子もやっぱり出てきます。

わたくしどもの学校では、最近ちょっと制度を変えまして、大学への推薦のための成績ウエイトを高校三年生の成績に大きく移したのです。するとやる気のある子は驚くほどぐーんと成績を上げてきますね。この子は今までなぜ自分を伸ばせなかったのか、については、こちら側の反省も必要なのでしょうが、要は受け入れた生徒をどのように伸ばすかということを、わたくしどもは考えたほうが良い方向に行くと思っているのです。

西岡　わたくしどもでも時々の話題として、例えばスポーツの優秀な生徒をどうしてとってはいけないのか、ということが話されます。高校で一生懸命スポーツをやっている子を大学に送りたいと思いますし、中学でそれほど頑張っている子なら本校に入れてやればいいという話題も出たりします。今までは、学力の面から切っていたわけです。しかし、塾の偏差値教育というものがでてくる昨今、内申書の取扱い、評価の方法を考えなければいけないのではないかという話しも出てきてはいるのです。あくまでも話しの段階なのですが……。

山中　そういう生徒が在籍していることが教育環境の形成の一助になるとか……。

清田　理想的には、基礎学力がしっかりしていて、その上に一本柱があるというのが一番いいのでしょうけれども……。

西岡　入学してきてスポーツは一生懸命やったが、学力はもうひとつついていけない面があるという生徒について、高校としてどう責任をとったらいいのかという点が残ってしまうのですね。

一貫教育に求めるゆとり

山中　発想をちょっと変えてみると、勉強ができるから上の学校へいけではなくして、「スポーツもできない者は仕方がないから残ってる頭で勝負しろ」という発想を中学・高校の先生はなさらないのですかね。推薦入学制度を考える場合には、一度発想の転換をしてみないと踏ん切りがつかないものなんだと思うのですが……。たとえばスポーツの成果に世間もわたくしたちも拍手を送る。この拍手は評価なのでしょう。だからスポーツのできない者は学力で来いというような発想の転換がありうるとか……。加えて、自分の担当する科目ができないということで評価するのが正しいのか、という発想も必要な場合がある。言い換えれば、ほかの面では人のできないことができるじゃないか、という評価の転換ですね。端的に言えば、自分の教科の成績が良いなんてのは、教師の自己満足にしか過ぎないという……。

どこかの「場」でその子が伸びていくという「場の問題」がありそうな気がするのです。生徒あるいは学生を全人格的というか多角的というか、そういう点から見なければいけないという気になっているんです。もし、一貫教育という枠組みが柔軟であれば、そこで生かせる部分が何かあるのではないかという気がします。いろいろな生徒を受け入れて、必ずどこかで「場」があたえられれば、その子はもっと伸びるでしょうね。

今井　先ほどの「入ってきた生徒をどのように育てていこうか」という発想とは異なりますが、ただ偏差値が高いからということよりも、その生徒のもっている能力あるいは個性というものを伸ばすためにうちの学校を選ぶ、そのような状況であってほしいわけです。そのためには、うちの学校がどのような学校でどのような教育を行うのかという、いわゆるスクール・アイデンティティーを明確にする必要があると思うのです。

帰国生の異文化体験を伸ばしてやる。それらを国内生徒にも共有させて国際性を身につけさせる。国内生徒との交わりの中で、日本というものを帰国生にも理解させる。留学など国際交流を進める。このようにして国際人の育成をはかっていく、というような……。

山中　入学してくる生徒の側から見れば、海外に在住していたというハンデーをメリットにしてくれる「場」があることになる。しかし、それができるのは一貫教育という柱があるからであって、単一国際高校ならばただちに受験進学体制の中に突入しなければならない……。

今井　おっしゃる通りです。ただ今後大学の方でも国際化が進んでいくと思いますが、わたくしどもの高校ではそれに応えられるような、いわば核となれるような生徒を送り出していくという意味での一貫教育があってもいいように思うのですが。

山中　大学もそれだけのゆとりをもって、同志社全体としての一貫教育体制に理解を示すという形で入学制度を考えてみてもいいのかもしれませんね。

濱中　個性の伸長という場合、社会も個性を認めてくれるのか、大学も広い意味で個性を認めてくれるのかという問題もある。遊び

の中で育つ自主性や個性が、受験体制の中で欠落していくことは大きいですね。分っているけれどもどう仕様もないという気もします。

山中　勉強という場合「させられている」というものが生徒の時代には強いだろうと思いますが、他方で、個性を伸ばすという場合、例えば、スポーツとか趣味でなにかに邁進する場合には「自分をいじめている部分」というものがあり、壁にぶつかった場合に主体的に乗り越えなければならないという自分に対する厳しさが必要になると思うのです。そういうものが感得されると、逆に勉強のほうも伸びるのではないかという気がするのですがね。塾の影響を失わせていく作用があるような気がするのですが……。

西岡　確かにわたくしもそう思いますね。自分の好きなことを思いっきり徹底的にやると、当然、壁にぶつかっていき、それを乗り越えることによって人間として一回り大きくなり、色々な事に向う自信と積極性が生れると思いますね。自分の得意なところで養われた「乗り越える力」が、勉強にも影響してくるだろうと思うのです。

ただ、高校は学力面において大学に送れるだけの力を生徒につけさせなければいけないという現実の前で、個性の伸長を目指すエクストラ・カリキュラムの活用、極端に言えば世界の桧舞台に立つスケートの上手な子を育てようという感じにはどうしてもなれないのですよ。

山中　個人的な意見ですが、大学には意外とそれを受け入れる「受け皿」はあるし、また、作らなければいけないと思うのですがね。

西岡　高校教育が、現在では準義務教育、あるいはほとんど義務教育という位置になり、それにつれて大学教育の位置づけも大きく変わってきているのですね。従前の高校教育の役割を大学が多分に担うようになり、大学の専門的な部分は大学院で勉強なり研究なりをしなさい、というように移行しつつある。大学の中で、学問の伸長をも含めた学生の主体的な個性の伸長とかが可能になりつつあるように思うのですが……。

山中　おっしゃる筋からしても、大学が大きな「受け皿」をもち、学生が自分で探し当てる「場」をカリキュラムなどの上で提供できることは必要なことだと思います。それだけに、入ってくる学生には「好奇心」・「冒険心」を強く求めたいですね。

平山　その「冒険心」というか、そういうものが欲しいですね。中庸に平凡に暮らせたらいいという感じの子が増えてますね。その意味からも、塾の影響は冒険をさせてもらえない路線教育になってしまい、冒険する、自分を試す機会が奪われてしまっているわけですね。

清田　高校三年を担当したときなどは、ラグビー部、サッカー部とかスキー部などを指導する場合、「こういう学校へきたのだから一生懸命頑張りなさい」と言うのですが、他方では大事な――自分の希望する学部への推薦が受けられるか否かにかかわる――試験を控えているわけですから、スポーツ活動、クラブ活動の奨励もむずかしい面がある。推薦にあたってはそれなりの学内基準があるわけですから、成績重視の現状では推薦しにくい場面がある。最終的にはその子らに対する指導をどうしたらいいのかと悩んでしまうわけです。結局、いまは勉強を頑張れと言わざるをえないのです。逆に、スポーツにかぎらずクラブ活動を一生懸命やっている生徒に対する

評価が大学にあれば、これも一貫教育の枠組みの中での一つの推薦入学方法だと思うのです。

濱中　個性の刺激という面では、わたくしどもの「礼拝」が、外来講師の話しなどを通じて自分たちも「あのようになってみたい、あのようにしてみたい」という刺激を与えているようです。確かに、生徒の将来、生徒の人生について刺激を与える場があまりありませんね。昔は一徹な先生がおられて自分の立場で生徒に話しをされたりしておられたようですが、今日では教員のほうも個性が発揮できる場がなくなってきているのではないかという気もしますね。

入試の多様化へのもくろみ

山中　帰国生徒入学の条件としての在外期間はどの程度を限度としておられるのですか。

今井　最低一年六カ月以上ですが、最近生徒の滞在期間の長期化がみられ、海外で生まれ育ち、入学前にはじめて日本にやってきたという生徒も多くなってきています。

濱中　大学としては、一貫教育の中で育ってきた個性を認めていくという方向はある程度あるわけですか。

山中　わたくしの個人的な意見にとどめますが、大学審議会の答申にもとづく「大学カリキュラムの改革」が、今後、大学全体で大きく議論されていくだろうと思います。その下に編成されるカリキュラムにおいては、学生は現在よりも自由な、それゆえに主体的・積極的に自分の履修方針を決め、また、もたなければならなくなるだろうと思います。そこでは「多様な学生に多様なカリキュラムを提供し、多様な人材を世に送り出す」ことが理念となるでしょう。これに対応して「多様な学生を入れる」入学試験の多様化という形が想定され予測されるとは言えますね。

濱中　例えば、スポーツの才能はあるが成績が悪い、機械関係が好きで機械いじりばかりやっていた、特定分野での成績が非常に良いといった生徒を大学のほうがおおらかに受け入れてくれるかどうかは、わたくしどもが個性の伸長というものを考える場合に大いに関わってくると思うのですが。そして大学のカリキュラム改革の影響が中学・高校に及んでくるのはだいぶ先のことなのか、あるいは及ばないのかという点ですがね。

山中　及ぶと考えた場合、先生方はどのように対応されるのでしょうか。中学にも高校にも単元というものがあるからその枠組みは守らなければならないだろうが、他方で、同志社の一貫教育を内容づけていく中でカリキュラムなどの有効利用と言いますか、生徒の個性と関心を伸ばす方向でカリキュラムを組むことが考えられ、それに対応した入学試験の多様化も図られるというように考えられるかどうかという点にかかわると思うのですが……。

今井　わたくしどもは、カリキュラムに関してはその方向ですね。今度のカリキュラムの改定に向けていろいろと議論しているわけなのですが、本校にはキリスト教主義・国際人の育成という大きな柱があり、さらに個々の生徒の個性・意欲・関心によっていろいろなことができるようなカリキュラムを工夫しなければならないと、わたくしは考えています。それによって「魅力あるカリキュラムをもった学校」というイメージも一つの特色としてもつことができると思うわけです。

山中　国際高校の場合には、入学試験につ

いてもう少し幅をもたせることも柔軟に対応することも可能かもしれませんね。

今井　そうですね。そういう学校を希望する個性的な多様な生徒に柔軟に対応できるような入試に変えていく必要があるかもしれませんね。なかなかむずかしいことだとは思いますが。

入試問題の作成と苦労

山中　同志社中学は難関校としてリストアップされているのですが、内申書は一切考慮しないようですね。考慮しないことの是非ともあわせて、内申書を考慮するという方向は議論されておられませんか。

濱中　内申書のあつかいについては、論議していません。入試そのものについての検討は、科目数とか実技試験の要否とかについて何回となくやっております。しかし、現行のやり方を改革するというのにはだいぶ抵抗があるみたいです。ただ、わたくしどもでは男女のバランスの問題があって、この科目を削れば男子が増えるといった科目数がらみの問題はちょっと考えなくてはという思いはあります。

平山　内申書は各府県あるいは学校によって違いますから、客観的に見るというのが難しいんですね。私個人の意見なのですが、内申書によるよりは指定校推薦あるいは校長推薦で入学判定をするほうが現実味がありますね。

山中　だんだん各論のようなところへ入っているみたいですが、「全国で四分の一の私立中学では小学校の内容を逸脱した問題が出される」と言われているようなのですが、これには同志社関係の中学も入っているのでしょうか。

濱中　逸脱している問題があるといわれたことがありますが、基本として入試委員会で確認することは、小学校の指導要領の範囲を越えないということなのです。あとの問題作成は各教科におまかせするわけです。図工などは小学校でおそらく教えておられるであろうという教科書の範囲を見ております。一二、三年前あるいはもっと以前には、こんなこと小学校でやっているのかと疑問に思うような問題を出してきた経緯はありますね。ただ、小学校では工作教育があまりできていず、教科書にカンナの図画がのっているがカンナを使ったことがない、キリも使ったことがないといった例もあります。

わたくしどもの入試問題は小学校の校長会で批判されたこともあります。美術と図工の試験の中味についても年度によってもだいぶ意見が違いますね。校長会で出された意見は各教科担当の先生方に報告されております。それらを通じて試験問題は改良されているのです。

平山　受験のテクニックを教える塾の入試対策にも問題があるし、塾でしか教えない難問を出題する学校もあるようですね。

濱中　一部の中学の出題傾向にあるようですが、そうしないと成績上位のものをとれないというわけなのでしょうね。

受験テクニックについては、国語の場合には問題を先に読んでそれから文章を読めと指導されている。四〇分という時間制限の影響もあるのでしょう。社会科の歴史の問題には平仮名で解答する。漢字を思い出していたら時間がかかるという徹底した塾の指導もあるみたいです。

西岡　小学校の範囲を逸脱しているかどうかは難しいときがある。中学と高校の場合でも数学の問題で中学の知識にちょっと工夫をこらしてみれば解ける、言い換えれば、塾で

解法を教えられて覚えてやるのではなくちょっと考えれば解ける問題を出題すると逸脱していると言われる。勿論、塾は同志社高校入試の傾向と対策というかたちでカバーしてくるわけです。いたちごっこのようなもので、最近では、必ずしも難問と言われるようなものではなく、基礎学力を見ることができる問題を出せばいいというように、ある意味では開き直っていますね。

平山　そうですね。もう開き直らないと問題作成はできないですね。わたくしどもの場合にも、小学校の校長会の要望書を一応の参考にしながら問題を考えていきます。わたくしの教科である理科の場合には、実験などの面で考えさせる問題を作成するのですが、いつの間にか塾によってそれに対応した「傾向と対策」問題がいっぱいつくられていますね。

山中　塾に悟られない良い問題を作るとか(笑)、小論文を書かせてみるとか、といった工夫はできないものですかね。

平山　作文とか小論文を書かせると生徒の能力や考え方がよくわかると思うのですが、合格発表までのかぎられた時間との競争になってちょっとむずかしいですね。なにか変えなければということは、それぞれの先生方でお考えなのですが……。

清田　香里の場合にも試験問題に多少の変更は考えられるのでしょうが、試験問題の中で塾に悟られないような工夫はなかなかこれは難しいですね。それに、小論文や作文ということになると八〇〇名近い受験生の答案を短期間に処理することはむずかしいですね。

濱中　わたくしどもでは、マークシート方式はとれないかなどという話題も出るときがありますね。

山中　話題が前後しますが、昨今、一二歳人口、一五歳人口が減少していくという避けられない状況がある。京都の各中学・高校には、難関校あり上位校あり中堅校ありという具合にランク付けもなされており、同志社関係はおおむね難関校に位置づけされている。進学人口の激減期に入って、どういう状況が生じるとお考えですか。

濱中　楽観的ですが、私は同志社中学を受ける生徒が減るとはあまり思わないのです。ただ、相対的に生徒の質が変わってくるという気はしますね。それから、同志社や立命館のように大学を頂点にもっている場合と灘高校とか洛星高校のように単一校の場合とで受験生の対応に違いが出てくるでしょう。むしろ大学のほうは、大学が沢山あるから受験生の層が絞られてくるのではないでしょうか。

今井　国際中学・高校では、海外への学校や塾の進出を考えた場合、同志社だからといって決して楽観視はできないと思っています。

平山　同志社の場合には進学人口の減少の影響はでていませんが、他の高校ではいろいろと対策をたてておられるようですね。

濱中　私学では、その学校の特色にもなるのでしょうが、スポーツを中心とした推薦入学などを採用されていくようですね。

西岡　それはやられているようですね。H高校は卓球が強いとか……。

平山　高校にスポーツ科を設けるところもありますね。特色を出すということと生き残るということが、各高校に苦労を強いているようですね。

濱中　同志社の各高校がこの方向をとった場合、同志社大学の側ではそういう生徒を受け入れてくれるのでしょうか。

山中　先ほども触れましたように、個人的

な意見ですが、大学のカリキュラムの多様化にともない入学試験の多様化の方向が連携すれば、そして学内推薦入学制度にその考えが及ぼされれば、考え方として可能性はあるでしょうね。

「受験・進学人口が減少する」ということと「進学率がどうなるか」ということは別問題なのですね。進学率も下がれば問題は大きい――大学のほうで学内高校の推薦枠は何人などと言っておれなくなるかもしれません（笑）――が、進学率が上がれば学生の質は問題になるでしょうね。その中で「多様にして潜在能力をひめた学生」が来てくれるといいですがね。

これからの教育環境

ところで、話題を教育環境のところへ移していきましょうか。受験生にとっても「魅力ある教育環境」は重要な受験動機だと思うのですが。特に進学人口の減少という事態の中で「良い生徒」を受け入れるためにも……。

西岡　教育環境の整備はしなければならないという話しは常々でておりますが、財政問題とか何とかが必ずひっかかってきてしまいますね。

平山　わたくしどもは保存問題をかもしだした清和館の改築問題で苦労しましたが、これも進学人口の減少期にあたって四〇人学級を想定して改築に踏みきったものなのです。保存問題などが絡んで工事が大幅に遅れ、授業にも影響が出てしまったのですが……こういう問題は全同志社として考えていただけたらと思いますね。

濱中　保護者の中にも「同志社中学って私学だからイメージの上ではもっとすごいと思っていたけれど、こんな古い施設・設備だったんですか」ともらされる方もおられますね。

山中　これは一つの例ですが、文部省の指導によってコンピューター教育が小学校からのカリキュラムに入ってくる。情報処理教育および情報教育というものは、今後、思考能力を養う上でも勉強の中で「道具」としての位置を大きく占めると思うのですが、これらへの対応はどうなのでしょうか。

濱中　今後とも避けて通れない私の教科は技術で「教えなくてはならない教科」なのですが、一台四〇万円も五〇万円もする機械を設置することは財政的な問題にひっかかってくる。教室の問題・冷房の問題などといろいろありますが、財政問題の中で教育環境の問題が頭打ちになってしまうのですね。

清田　文部省から家庭科という新しい科目を設けるようにといわれているのですが、建物はない、設備はない、何もないという状況で悩むわけですが、つまるところ財政の問題にぶち当たるのです。

平山　いわゆる個性の伸長という方向でカリキュラムなどの改定を行っていく場合にも、やはり教室・設備という「器」の問題にぶつかりますね。

濱中　生徒の個性を伸ばしてやるということは、同時に生徒のニーズをかなえてやるというかたちで対応しなければならない。そうすると人が足らない、教室が足らないという問題にぶち当たりますね。各学校ともにカリキュラムについて検討されていると思いますが、カリキュラムを受け入れる環境整備ができていないのが現状でしょう。

ところで、同志社の各中学・高校のかかえている問題について、全同志社として考えていただく「場」がないような気がしますが。このような気持ちが教職員の中に強いです

ね。なにか「こんな事ができる」、「こういうことがしたい」という場合に、全同志社として考えていただくうえでの統一性に欠けているのではと感じますね。

山中　同志社を非常に愛するがゆえに、現実的な問題があったり心情的な問題があったりいろいろあるでしょう。それらが全同志社的に浮かび上がってくることは必要でしょうね。

ところで教育環境ということでは、大学・高校・中学が全体として学園環境をつくりだしているという今出川校地の雰囲気はどうなんでしょうね。

平山　あんまりそれぞれが見え過ぎてしまって、いろんなことが分かってしまう。いつも一緒に生活しているわけで、同じキャンパスで同じような生活をしているから、いろいろなことがわかってしまって大学に進学したという気持ちにならないようですね。

西岡　わたくしども高校の目からみて、高校と中学、もちろん、大学も別のところにあるのがいいと思いますね。キャンパスを一緒にしていると中学の延長としての高校、高校の延長としての大学という具合に、気分的に新しい学校にきたという感じがしないでしょうね。

身障者教育への対応

山中　身障者入試についてご意見をうけたまわりましょうか。

平山　わたくしどもでは入試説明会において受験を拒まないむねを説明します。特別扱いはしておりませんが、難聴者の生徒の場合には席を前のほうにするぐらいで、一般の生徒と同じようにしています。車椅子を使用する身障者の場合については、そのためのスロープ設備がありませんので、そういう環境でよかったら受験して下さいという説明をしております。

清田　わたくしどもも同じ取扱いです。受験に先立って学校を見ていただき、就学に困難かどうかを見極めていただいております。困難でないとお考えの場合には受験をしてもらっております。

しめくくり

山中　まだまだお話しを伺いたいのですが、限られた時間の中でいろいろな話題についてご意見を賜りました。まとめてみますと、それぞれの中学・高校においては、進学人口の減少という状況にあって、特段の対策は急務とはされていないが、同志社の特色としての一貫教育体制に内容づけがなされることによって、中学・高校にあっては多様なカリキュラムを編成して生徒の「個性の伸長」に取り組むにやぶさかではないという感触を得ました。入学試験の在り方についても、それぞれの学校がそれぞれに話題という形であれ検討という形であれ、対策なり改革なりを考えておられるということも明らかになりました。

特に、ご意見として「全同志社的に課題を考えることの重要性と、あわせて、一貫教育体制の実質的な位置づけの必要性」が強く出てきた点は、今回の大きな成果だったと思われます。今後とも、このような全同志社レベルの意見交換がなされることも大切だという認識もえられたと思います。

（一九九一年七月二十五日収録、於有終館担当理事室）